

な

ご

み

っ

う

し

ん

発行日：平成30年6月25日（第42号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を行ってみて、まず浮かんだのは母のことでした。母の死はあまりにも突然でした。感謝の言葉を伝える機会もないまま、天国に逝ってしまいました。

「いのちの授業」で一番勉強させてもらったのは私だったのかもしれませんが。

平成24年4月に旅立っていった我が母のことを紹介します（4）。

所長 小沢 浩

～桜～

私にとって、母は絶対的な存在であった。そんな母が70を過ぎたころから、小さくみえるようになった。買い物と一緒にいくと母がゆっくりと歩く。腰をかがめながら歩く。私が母の後ろを歩く。実家に戻るたびに歩く速度が遅くなっていった。いつしか買い物カートを押さなければ歩けなくなった。

ずっと一人で住んでいた母は、横になり寝ることが多くなった。あれほどきれい好きだった母が掃除をしなくなる。洗濯物が貯まる。洗っても干さなくなる。そのままかびがはえてしまう。私、兄、姉が指摘すると怒る。そのやりとりを見ていた義姉は何も言わずに服を買って変えてくれていた。

料理もしなくなる。近くに住む兄、義姉が毎日食べ物を届けるようになった。

私は、歩いてもらおうとときどき実家に戻り買い物に連れて行った。母は喜んで買い物をしている、…ようにみえた。そのため時間を作り実家に戻り何回か買い物に連れて行った。親せきの家に買い物のあとに連れて行ったこともあった。

「楽しかったよ。ありがとう。」

と言われ、喜んでくれていると自分では

思っていたが、それからしばらくして私と買い物に行った後は、数日寝込んでいることを知った。

食事もとらない、洗濯もしない、風呂も一人で入れるのも危ない。北海道にいる姉が実家に来た。姉は、子どもたちが皆大学へ行き少し余裕ができたため、結婚してから初めて2週間の予定で富士宮の実家に戻ってきてくれた。私も家族を連れて会いにいった。姉がこんなに長く滞在したのは、本当に久しぶりだった。久しぶりに兄弟みんなが揃い、それはにぎやかだった。そんな様子を母はうれしそうに眺めていた。帰り際に

「浩、今度はいつ来るの？」

と聞いてきたので、

「近いうちにまた来るよ」

と返事をして東京に戻った。

私が帰ってから次の木曜日兄から電話があった。

「浩、おまえお母さんに『今週また来る』って言ったか。『そんなこと言っていない。』と言いきかせても、何回も何回も繰り返すので、本当かなと思って電話した。」とのことであった。今週の約束はした覚えはないが、

「近いうちにまた来るよ。」

と言った帰りの言葉を間違えて理解したのかもしれない。私は夜遅くなるけど行くことを決めた。兄には否定しなくていいと伝えた。

金曜日の仕事を終え、夜遅く実家に着いた。富士宮に着いたのは午前0時を回っていた。母は横になっていたが、すぐさま眼をさまし私の帰宅を喜んでくれた。それから、2人で話をした。とりとめの話をした。気づいてみると午前3時を回っていた。朝になると姉兄と義姉と孫でいつものように騒がしかった。皆でわいわいやっているのを母は嬉しそうに眺めていた。いつもの光景であった。しかし、すべてに終わりがある。そんな当たり前のことを私は気づかなかった。今回の帰り際には、

「浩、忙しいからもう来なくていいよ」と言って、笑って送り出してくれた。たった半日の帰宅であった。

その次の土曜日の朝、兄から電話がかかってきた。その日は姉が北海道に帰る日であった。兄の言葉はあまりに突然だった。

「お母さんが亡くなった。」

電話を受けた妻は、その場に座り込んだ。腰が抜けてしばらく立てなかった。家族で急いで富士宮に向かった。

朝お風呂に入っていて、姉がお風呂を見に行くと、

「いちいち見に来なくていいよ！」

と言っていたため、しばらくそのままにしていた。でもあまりにも遅いので、もう一度様子を見に行ったら浴槽に浮いていた。CT検査では、肺に水もなく、溺れたのではなく心臓などによる急逝だったのではないかということであった。

母は笑っていた。穏やかな顔であった。清らかな顔であった。気高い顔であった。その顔を眺めていて、私は広隆寺の弥勒菩薩を想いだした。私が1番好きな仏像である。母は弥勒菩薩だったのかもしれない。人生の苦勞に耐え、悲しみのすべてを心の奥にしまい、おばを守り、父を守り、子どもを守り、いつも微笑んでいた。

葬式は母が亡くなってから4日後に行われた。多くの人が集まった。葬儀場から富士山の火葬場までみんなでバスに乗った。皆でわいわいやっていた。いつもの光景であった。母は嬉しそうに眺めていた……、私にはそう思えた。

火葬場までの道は花がいっぱいであった。いたるところに花が咲いていた。バスから、桃、すいせん、みつばつつじが見えた。火葬場に近づくと道路わきの桜が咲き誇っていた。満開だった。私にとっては2回目の桜である。東京の桜はすっかり散っていた。花が好きな母らしい粋な演出である。

火葬を終えて、骨揚げに母のもとに行った。

母の骨は小さかった。あまりに小さかった。

力の限り生き抜いた母の姿がそこにあった。



『奇跡がくれた宝物』
小沢浩 著

クリエイツかもがわ
より発売中